

○公 貴典公

○公夫人 絮子君

○藤原兼迢伊集院隠山

○藤原尚貞 上原兎十郎○平季道伊地知貞右衛門○藤原兼貞伊集院清遊

○藤原兼愷伊集院八兵衛○平季翹 伊地知龍潜 ○涼相君 貴柄公夫人

綺佐子君

○平種定 田中休之進 ○藤原親直 安山作十郎○藤原氏輔増水吉兵衛

○藤原昌貞内田五左衛門○藤原親曉川上市郎兵衛○藤原親備安山代七郎

○平昌憲 高野夕可 ○平重朝 伊知地休意 ○平季休伊知地貞太郎

○藤原清方 山下喜才太○藤原貞如

○藤原兼倫

蘭牟田周右衛門

伊集院八之丞

○紀景之 桑波田龍雲 ○伴兼伯 肝付平右衛門○平清憲 前田藤角

○伊集院八兵衛 母 ○平季虔伊知地宗右衛門○藤原善弼 長友庄藏

○伴兼頭 肝付啓迪 ○平景雄 宮原源左衛門○平季融伊地知右源次

○藤原親敬安山三左衛門○平季昵 伊地知大隠 ○藤原智昭谷山孫兵衛

○藤原實裕 町田大雅 ○慈誠君 貴澄公夫人 ○景德公 貴澄公

惠能子君

35 初冬風

慈誠君

聞馴し軒はの松のかせたにもけさより冬にかはるはけしさ

- ① 卷四 冬 916 ② 無い

③ 松の上を冬の風、上蔀を開けた部屋の火鉢に火

④ 貴澄夫人、於ゑん、恵能子。

生年未詳。

安政七（一八六〇）年八月七日卒。（八十九歳）。

日置家八代左衛門久甫の女。

- ⑤ 二首、一首（1329）、無い

36 朝花

景德公

明初る軒の外山の薄霞ほのかにしらむはなの色哉

- ① 卷一 春 220 ② 和歌「花の色そわかるゝ」

③ 上蔀を上げた屋敷、霞の中、遠くの山の桜が見える

④ 第十代貴澄。小源太、玄蕃、備前、越後、美作、元直、予章

元文三（一七三八）年十一月一日生。

文化四（一八〇七）年三月五日卒。六十八歳。

島津第二十一代吉貴の第五子、母郷田仲兵衛兼近女。

- ⑤ 十二首、三首（59 128 431）、十八（二十一）首

浪の藻屑集中二千首中より三十六人の秀歌をえらひ

いにしへの三十六譚仙になすらへてたてまつるへきの由

仰こと侍りければ各そのうたのところに随ひ図画に

うつして奉ることしかなり

天保七年九月

平 季虔

右三十六歌仙伊地知氏より借受て寫しぬ絵は藤井

蘭香斎なり

慶應元年七月

町田 實維

本書の表紙蠹魚のためいたく損ひしに依て大正五年

十月あらたむ

31 水郷月

平 季融

澄月もひかりくたけてちる波の玉嶋川に秋風そふく

- ① 卷三 秋 784 ② 詞書？「月次歌の中に」

- ③ 葦や木の杭の間を流れる急流、満月の光がきらきら輝く

- ④ 伊地知氏。季達、佐源次、貞右衛門、右源次。

寛政十（一七九八）年三月二十六日生。

没年未詳。

取次役、文化十四（一八一七）年々文政五（一八二二）年。

- ⑤ 七十七（八十一）首、一首（120）、三首

32 初冬時雨

平 季昵

染果て秋の名残も今はとて木葉を色にふる時雨かな（左から）

- ① 卷四 冬 913 ② 和歌「染はてし」「時雨ふるらし」

- ③ 丘の木々を激しく吹く時雨に紅葉も緑の葉も散っている

- ④ 伊知地氏。貞助、隆仙、武左衛門、大隠。

享保九（一七二四）年九月九日生。

文化四（一八〇七）年八月十九日没。八十二歳。

寛政六（一七九四）年六月六日から勘定奉行。

- ⑤ 六（七）首、一首（969）、十二（十三）首

33 川款冬

藤原 智昭

笈士も心やよとむよし野川さく山吹の花にせかれて

- ① 卷一 春 322 ② 無い

- ③ 川の両岸に山吹、川で笈士が竹棹を操っている

- ④ 谷山氏。八十郎、八之進、孫兵衛。

享和三（一八〇三）年三月十日生。知盈の子。

没年未詳。

天保五（一八三四）年九月から御右筆格。

- ⑤ 三十三首、無い、無い

34 夜時雨

藤原 實裕

小夜時雨晴ては曇る浮雲に月のひかりも定めなき空

- ① 卷四 冬 924 ② 無い

- ③ 時雨が降りながら、雲間には月が浮かぶ空

- ④ 町田氏。俊昌、源七、太郎右衛門、助兵衛、風山太雅。

享保五（一七二〇）年三月十九日生。

寛政元（一七八九）年三月七日没。六十八歳。

家老、寛延二（一七四九）年々天明五（一七八五）年。

- ⑤ 四首、無い、一首

27 山月

藤原 善弼

葛城やかけもたかまの山かせに雲のよそなる秋の夜の月（左から）

① 卷三 秋 727 ② 無い

③ 海岸から聳える山々、重なる雲々の彼方の月

④ 長友氏。庄蔵。

生没年未詳。

霧島社や飛岡天神社の奉納歌を詠じている。

文政九（一八二六）年三月、格御代官。

⑤ 六首、無い、三十七（三十八）首

28 馴戀

伴 兼頭

海士人の塩なれ衣馴てたに重ねぬ夜半を猶やうらみん

① 卷五 恋 1185 ② 詞書？「月次三首歌に」

③ 塩田で塩をかいているあま、塩炊屋からは煙

④ 肝付氏。啓迪。

生没年未詳。

系譜未詳。

事績未詳。

⑤ 五首、一首（372）、十二首

29 遠き境にさすらへけるとき

平 景雄

ましらなく軒の外山に月落て子をおもふ聞は我そ悲しき

① 卷六 雑 1768

② 詞書「其後遙なる境にさすらへて、いとわひしう、かすかなる山里にか

きこもりゐけるに、折々よみ侍り

し歌の中に」

③ 山の麓の方丈、赤味を帯びた雲と赤い三日月が遠くに

④ 宮原氏。源左衛門。文化十（一八一三）年から郡奉行。

⑤ 百二十八首、四首（282 922 1015 1232）、八十五首

30 幼き子を失ひける時

藤原 親敬

死出の山分やまよはむとはかりをおもふ心もかきくらしぬる

① 卷六 哀傷 1887 ② 詞書「失ひ侍りける」

③ 竹馬とでんでん太鼓

④ 安山氏。三左衛門。親意の養子。

生没年未詳。末野兼道の二男。

宝覚公が卒した時、出家したか（『浪の藻屑』）。

天保十（一八三九）年から家老。

⑤ 百四十四（百四十六）首、三首（244 245 491）、無い

23 厭戀

伴 兼伯

逢事も絶間かちなるさゝ蟹のいとはるゝ身の果そ苦しき（左から）

- ① 卷五 恋 1261 ② 無い

③ 蜘蛛の巣、真中に蜘蛛がいる

④ 肝付氏。平右衛門、平左衛門。

生没年未詳。

系譜未詳。

郡奉行、享和四（一八〇四）年～文政三（一八二〇）年。

- ⑤ 十四（十五）首、二首（649 1348）、二十四首

24 月前鹿

平 清憲

鹿のねも澄昇るなり高圓の尾上の月に妻や問らん

- ① 卷三 秋 659 ② 無い

③ 山上に満月、山に一頭の鹿

④ 前田氏。藤角。

生没年未詳。

百首歌を詠じている（『浪の藻屑』）。

気色の杜に行ったことがある（同）。

- ⑤ 百四十二（百四十四）首、一首（62）、無い

25 とし老て後秋のはし。つかた娘の子にをくれて

藤原 兼愷 母

あたし野々夜半のけふりと消しよりわすれかたみの俤そたつ

- ① 卷六 哀傷 1883 ② 詞書「初つ方にむすめに」

③ 琴、本、筆立（大小三本の筆）

④ 伊集院氏。伊地知季昵女。春子。

明和元（一七六四）年三月十一日生。

没年未詳。

伊集院兼貞の妻。

- ⑤ 五十二首、三首（415 1085 1086）、三十六首

26 雪の降りける朝

平 季虔

降初て友まつ雪のけしきにもひとりはおしき曙庭

- ① 卷四 冬 1037 ② 詞書「初雪の」あしたによみ侍りける」

③ 竹垣や屋根などに雪、室内では鉄瓶が温められている

④ 伊地知氏。季籥、佐源次、宗右衛門。季顯の養子。

明和五（一七六八）年七月十五日生。季昵の長男。

天保十二（一八四一）年三月八日没。七十二歳。

事績は解説参照。

- ⑤ 百八十^(四)首、二首^(三)（134 958）、百三十一首

19 田家鹿

藤原 清方

小鹿なく山田のおしね色付てかりほの秋やよ寒なるらん

①巻三 秋 675 ②無い

③穂の垂れた稲田の手前、見張り櫓、遠くに鹿

④山下氏。喜才（万）太。

生没年未詳。

兼愷達と共に飛鳥井雅光の歌門に入ったと記す（『浪の藻屑』）。

⑤二十二（二十三）首、一首（236）、三十首

20 兼愷の山荘逍遙舎にて

藤原 貞如

松風も通ふ笈の山水にうき世の外の響をそきく

①巻六 雑 1547 ②詞書「同じ山荘に折々まかりてよみ侍りける歌の中に」

③後に山を控えた藁垣きの山荘、松の間、手水鉢まで笈が走る

④藺牟田氏。周右衛門。

生没年未詳。

文政十一（一八二八）年、右筆兼奥御用人。

⑤十四首、一首（533）、二十四首

21 澤畔鶴

藤原 兼倫

呉竹のふしみの沢にゐる田零のいく千世かけてすまむとすらん

①巻六 雑 1615 ②無い

③丁字形の溝の手前に一番の円頂鶴

④伊集院氏。勘太郎、八之丞、吉左衛門。

文化十二（一八一五）年□月六日生。兼愷の長男。

没年未詳。

天保十二（一八四一）年、近習役。貴典家老。

⑤七（八）首、無い、無い、

22 高雄山にまかりける時

紀 景之

山風に紅葉吹卸す清瀧の岩瀬の波も色かはるらし

①巻四 冬 948 ②詞書「登り侍り」

③岸に紅葉、川にも紅葉が流れている

④桑波田氏。景義、鉄之丞、竜瑞、竜雲。

生没年未詳。

天保十一（一八四〇）年御連師。医師。

天保十三（一八四二）年没（牢死）。

⑤九十八首（墨消にして「読人不知」）、二首（B 294）、一首

15 名所滝

藤原 親備

冬は猶雪のしら糸かけそえてみたれそ増る布引の瀧

- ① 卷六 雑 1480 ② 無い

③ 滝と岸の松等に積もった雪

④ 安山氏。代七郎。

天明六（一七八六）年六月二十日生。

文政六（一八二三）年五月二十一日没。三十六歳。

文化十三（一八三〇）年五月四日、御連師。

- ⑤ 五十八（五十九）首、一首（185）、九十九（百）首

16 梅

平 昌憲

咲匂ふ梅のさかりの折からや賤か軒はも人にとはれむ

- ① 卷一 春 95 ② 無い

③ 板屏の向こうに咲く梅、手前には竹箒が立てかけてある

④ 高野氏。喜左衛門、夕可。

生没年未詳。

安永五（一七七六）年五月、格御家老座勤御記録方係。

御馬役。

- ⑤ 二（三）首、無い、二首

17 雨夜老人

平 重朝

袖ぬらすね覚の空のよるの雨あたにふりゆく身のおもひ哉

- ① 卷六 雑 1700 ② 詞書「雨夜老人と云事を」

③ 庭に面する部屋には灯明、外は雨風

④ 伊知地氏。休意。

生没年未詳。

海瀉伊地知家重親流八代か。

事績未詳。

- ⑤ 二十一首、無い、無い

18 落花

平 季休

吹風の治れる世にをのつからかきりありてや花のちるらん

- ① 卷一 春 277 ② 和歌「春風の」「ならひありとや」

③ 散る桜の花、木の上は霞がかかる

④ 伊知地氏。兼舊、作左衛門、貞太郎、宋兵衛。

生没年未詳。馬場弥兵衛二男。

文政二（一八一九）年、季虔の賀養子となる。

嘉永六（一八五三）年、勘定奉行、御番頭與頭。

- ⑤ 八十二首、一首（565）、無い

11 餘寒

藤原 親直

天津風春をいつくにふきとちてまたさえ返る雲の通ひ路

① 卷一 春 90 ② 無い

③ 二本の松と重々しい雲や風

④ 安山氏。仲八、作十郎。

文化九(一八二二)年十月九日生。川上六郎兵衛親盈二男。

文政十一(一八二八)年十月、安山代右衛門親博養子となる。

記録奉行。嘉永二(一八四九)年、学館勤。没年未詳。

⑤ 四十六首、無い、無い

12 懷舊

藤原 氏輔

春秋に馴てかはらぬ月花も身し世の友そ今はすくなき

① 卷六 雑 1741 ② 詞書「懷旧歌よみ侍りける中に」

③ 肘掛、硯箱、手紙、短冊

④ 増水氏。龍右衛門、吉左衛門、吉兵衛。

生没年未詳。

右筆、文政五(一八二二)年。

文政十一(一八二八)年、嘉永元(一八四八)年。

⑤ 百八十(百八十二)首、二首(52¹²⁴⁶)、三十八(四十)首

13 翫花

藤原 昌貞

まちおしむ我もあたる心哉咲けはとく散花の浮世に

① 卷一 春 211 ② 無い

③ 桜の枝に掛けられた幕、桜には横風

④ 内田氏。休之進、正、五左衛門。

天明八(一七八八)年十二月二十五日生。昌孝の子。

没年未詳。

奥御用人、弘化五(一八四八)年、嘉永三(一八五〇)年。

⑤ 六十七首、一首(264)、十九首

14 寐覚郭公

藤原 親暁

はつねより驚かされし時鳥いく夜の夢の名残問らん(左から)

① 卷二 夏 411 ② 無い

③ 空を渡る郭公、紅い木槿が軒端に咲いている藁葺家

④ 川上氏。惣十郎、仲兵衛、仲四郎、市郎兵衛、六郎兵衛。

文化五(一八〇八)年八月九日生。親盈の子。

没年未詳。

安政二(一八五五)年から家老。

⑤ 三十三首、無い、無い

7 父の身まかりて其忌の果侍りける時

藤原 兼愷

月も日も過にける哉なき跡をしたふ心の闇のまきれに

- ① 卷六 哀傷 1881 ② 詞書「父の身まかりて」ナシ
「侍りける折」

- ③ 灯台の下、遺品かと思られる冊子、卷子

- ④ 伊集院氏。勘太郎、八之丞、吉左衛門、八兵衛、潜龍。

天明七（一七八七）年七月二十五日生。兼貞の長子。

安政二（一八五五）年正月十二日卒。本誌第二十五号参照。

- ⑤ 百七十四首、六首（^五390 467 1095 1096 1299 1300）、百二十四首（^{三十一}）

8 瀧花

平 季翹

水上の岩本さくら咲しよりはるや落そふ瀧の白糸（左から）

- ① 卷一 春 241 ② 和歌「ちるまゝに」

- ③ 二段に落ちる滝と、左右の岸に咲く桜

- ④ 伊知地氏。貞助、隆仙、龍潜。

安永元（一七七二）年十一月二十一日生。季昵の二男。

天保四（一八三三）年十二月二十八日死。六十一歳。

文政四（一八二二）年正月から側医師。

- ⑤ 三十五首、一首（¹¹⁶⁴）、五十三（五十五）首

9 山家煙

涼相君

仄か成るけふりの末も淋しきはたか住山の夕暮の空

- ① 卷六 雑 1516 ② 無い

- ③ 松や紅葉の生える山の間から立ち上る煙

- ④ 第十二代貴柄室、綺佐子、越前家十七代周防忠救の女。

生年未詳。

文化十四（一八一七）年七月二十九日卒。（二十七歳）。

飛鳥井雅光の歌門に入つたと詞書に記す（『浪の藻屑』）。

- ⑤ 十首、二首（286 613）、無い

10 秋夕

平 種定

身に堪ぬ誰か夕くれのならひよりあきを哀と詠めきぬらむ

- ① 卷三 秋 678 ② 無い

- ③ 遠く山と紅葉、近くの家々や紅葉の間から煙が上る

- ④ 田中氏。休之進。

生没年未詳。

正八幡宮奉納歌を詠じている（『浪の下草』）。

某年の秋、兼愷と旅をしたことがある（同）。

- ⑤ 五首、一首（417）、十七（二十）首

3 惜月

藤原 兼迢

ふくる夜も残りすくなき老の身は猶おしまるゝ月のかげ哉

① 卷三 秋 818 ② 和歌「老か身に」「有明の月」

③ 遠く雲間の月、近く衾、高枕、置時計

④ 伊集院氏。俊親、俊益、俊相、勘太郎、八兵衛、隠山蒼龍。

元禄十一（一六九八）年二月十七日生。

安永三（一七七四）年七月十四日没。七十六歳。

家老、享保二十（一七三五）年、明和六（一七六九）年。

⑤ 十一首、一首（57）、十三首

4 川氷

藤原 尚貞

さと人もまたふみ分ぬ朝川の氷の上に風わたるなり

① 卷四 冬 986 ② 無い

③ 岩間の流れ、淀みに氷が張っている

④ 上原氏。彦八、兎十郎、仁右衛門。

文化八（一八一）年六月生。尚徳の長男。

没年未詳。

嘉永五（一八五二）年、物奉行、御近習役。

⑤ 十六首、無し、無し

5 夕落葉

平 季道

ゆふ暮は猶身をしほる山かせにおもひみたれて木葉ちるなり

① 卷四 冬 940 ② 無い

③ 岨道、紅葉が横に飛んで行く

④ 伊地知氏。重龍、貞助、早兵衛、貞右衛門。

享保七（一七二二）年四月十二日生。

宝暦十（一七六〇）年十月二十九日没。六十八歳。

御用人、寛保元（一七四一）年、宝暦四（一七五四）年。

⑤ 十首、一首（486）、一首

6 月下梅

藤原 兼貞

さく梅の花のひかりは霞む夜に軒はの月のかげ匂ふなり

① 卷一 春 101 ② 無い

③ 満月と幽かな雲、月光に浮かぶ方丈と軒端の梅

④ 伊集院氏。兼昌、兼廉、勘太郎、八兵衛、善之丞、清遊。

宝暦九（一七五九）年七月二十五日生。兼東の長男。

天保五（一八三四）年六月十四日没。七十四歳。

家老、天明四（一七八四）年、文政元（一八一八）年。

⑤ 七首、一首（124）、三首

翻刻と研究

凡例

- 一、詞書、作者名、和歌をそれぞれ一行に記した。
 - 二、左から記されているものは(左から)と和歌の下に注した。
 - 三、①は、『浪の藻屑』での、巻、部、和歌番号である。
 - ②は、『浪の藻屑』の校異である。
 - ③は、絵柄の説明である(写真参照)。
 - ④は、作者の通名、号、生年月日、役職など、伝記的内容を記した。役職は、なるべく最高又は最後のものを記すよう心掛けたが、資料不足などの為、充分なものとはなっていない。
 - ⑤は、上から順に、『浪の藻屑』での歌数、『松操和歌集』での歌数()内はその和歌番号、『浪の下草』での歌数である。
- 猶、『浪の藻屑』、『浪の下草』で、実数と各集巻末の歌数とが異なる場合は、()内に巻末に記されている歌数を示した。

翻刻と研究

1 秋の半成る頃 風いと野分立て いみしうはけしかりければ

公

秋の田の稲葉吹しく嵐にはたみの心もさそしほるらむ

①巻三 秋 857 ②詞書「はけしかりける時」

③鳴子を渡して、守っている稲

④第十三代貴典。又四郎、讃岐、栖山。

文化七(一八一〇)年九月十九日生。

元治二(一八六五)年正月十八日卒。五十五歳。

父第十二代貴柄、母綺佐子、涼相君。

⑤四十八(五十)首、無い、無い

2 雉

公夫人

花の色もあくる外山の朝ほらけ聲あらはれて雉子鳴なり

①巻一 春 291 ②無い

③野山の遠方に桜、近くに雉

④貴典夫人、絮子。

島津山城忠寛の女とすれば、貴典の姪。貴敦の母。

生年未詳。

明治九(一八七六)年八月七日卒。(六十四歳)。

⑤七首、無い、無い

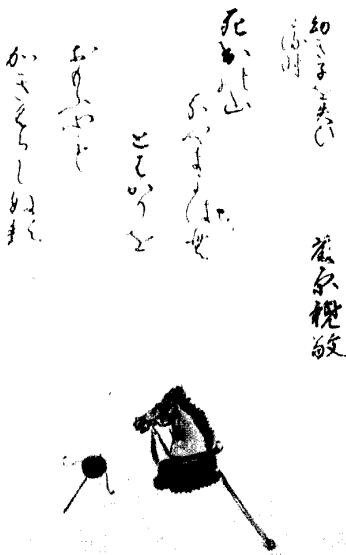
28 伴兼頭



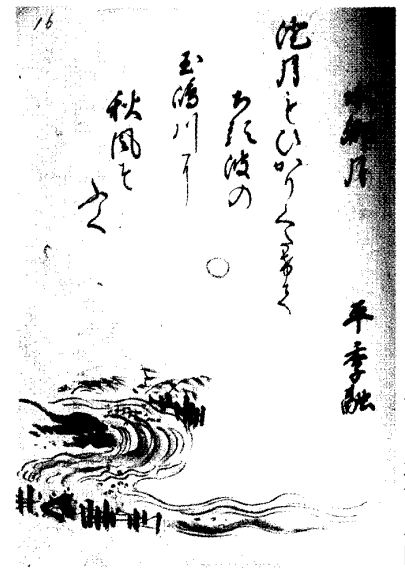
29 平景雄



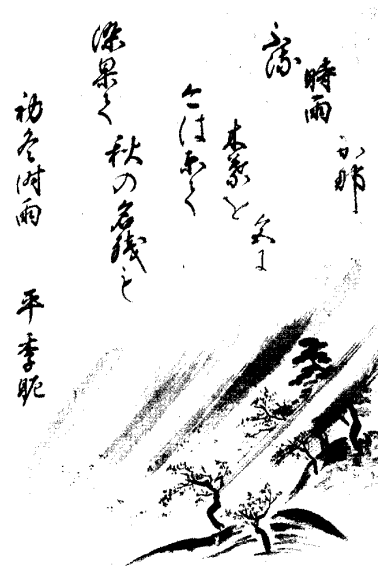
30 藤原親敬



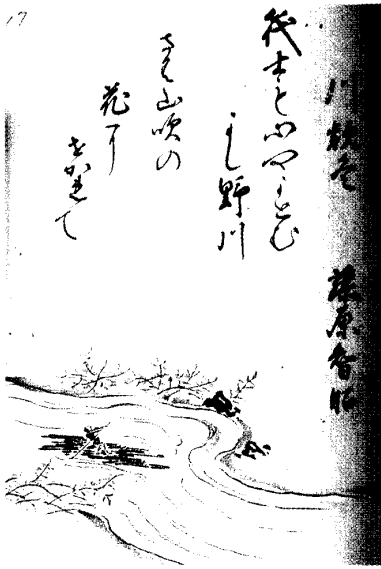
31 平秀融



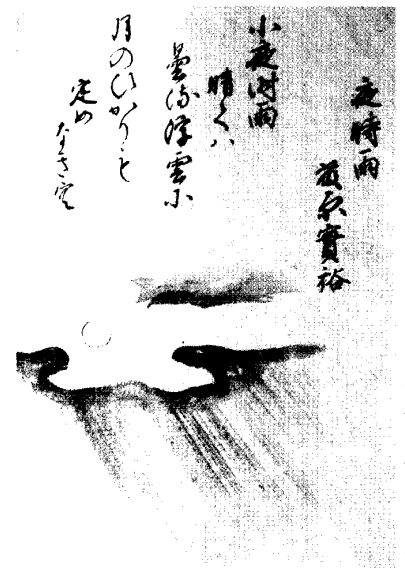
32 平秀昵



33 藤原智昭



34 藤原實裕



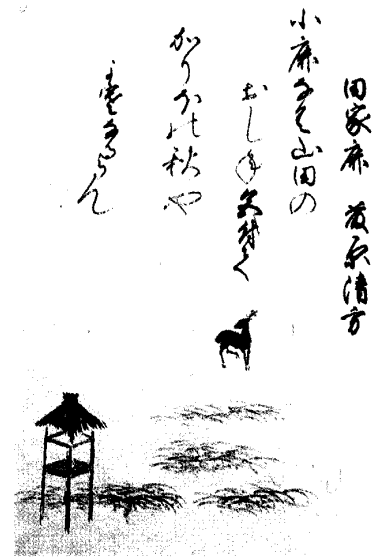
35 慈誠君



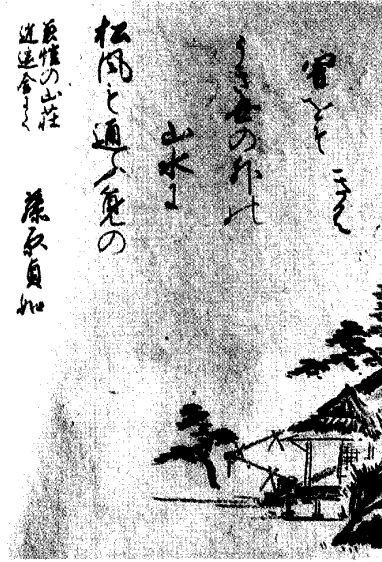
36 景德公



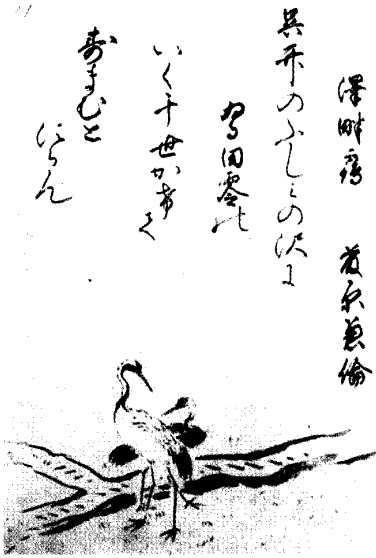
19 藤原清方



20 藤原貞如



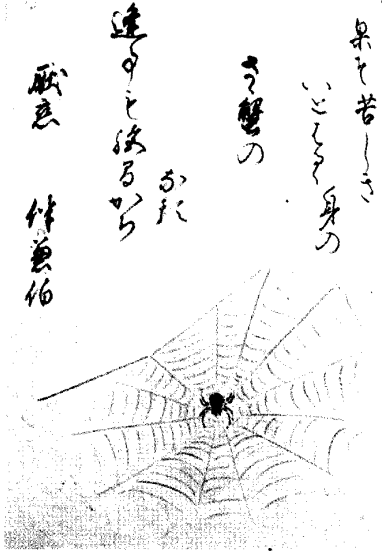
21 藤原兼倫



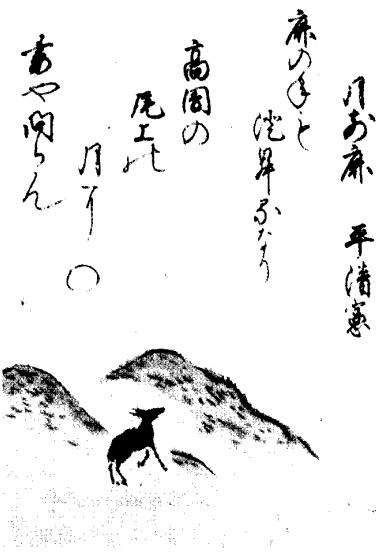
22 紀景之



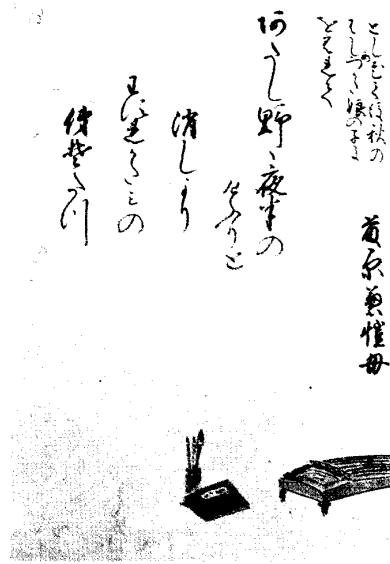
23 伴兼伯



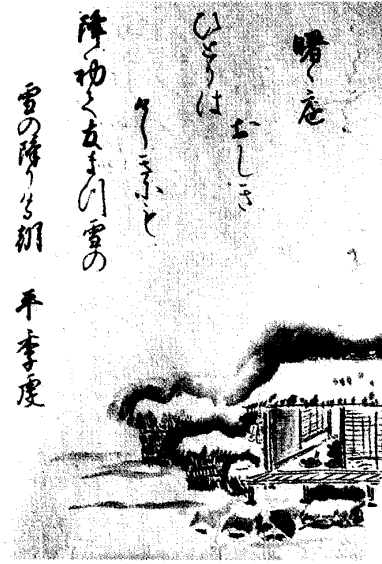
24 平清憲



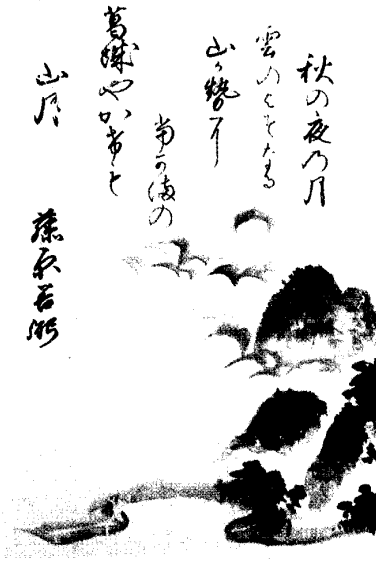
25 藤原兼愷母



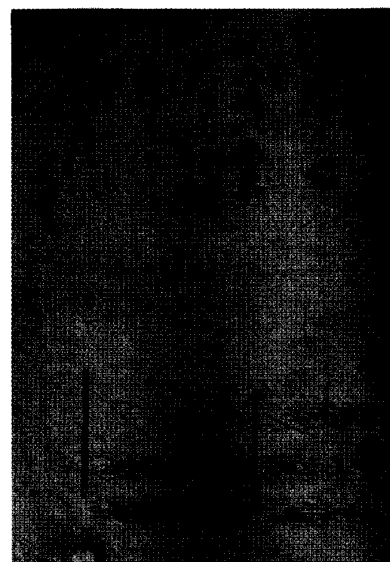
26 平秀度



27 藤原善弼



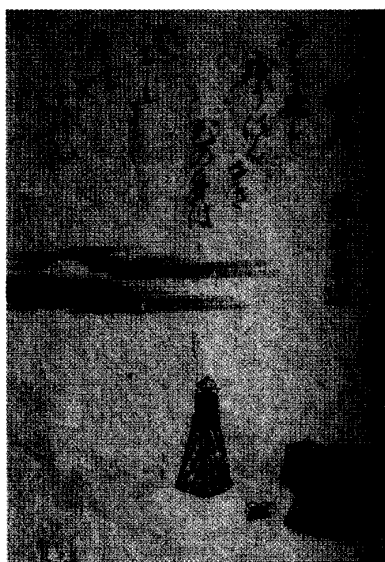
六



1 公



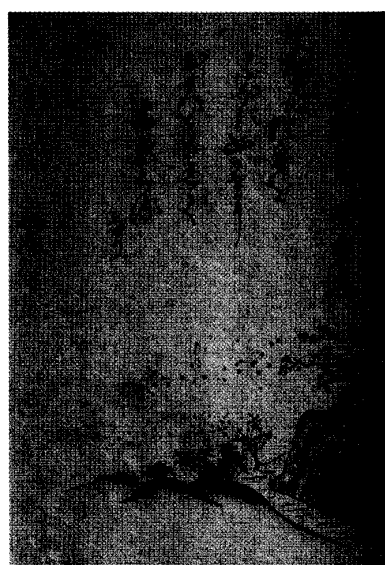
2 公夫人



3 藤原兼迢



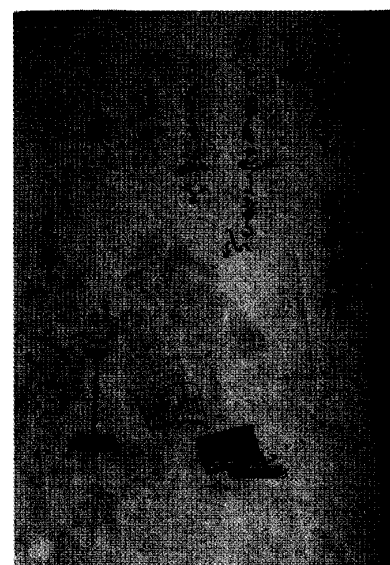
4 藤原尚貞



5 平秀道



6 藤原兼貞



7 藤原兼愷



8 平秀翹



9 涼相君

た結果は、

『浪の藻屑』不足数

人数	差
1	九十八
2	四
0	三
4	二
8	一
21	〇

『浪の下草』不足数

人数	差
1	六
0	四
2	三
2	二
5	一
13	〇

のようになっている。『浪の藻屑』で九十八首の差があるのは、福井迪子元教授が既に指摘している桑波田景之である。彼の場合は、本集成立後七年目に牢死しているので、その後、所蔵者の手で彼の名前が墨消されて、「読人不知」と書き改められたものである。四首不足しているのは、伊知地季虔、同季融の親子である。又、『浪の下草』で六首不足しているのは伊集院兼愷である。いずれも多数入集者であるが、実数が不足している理由は詳にし得ない。

最後に、編者季虔の略伝を記そう。

季虔は、武左衛門季昵の長男として明和五（一七六八）年七月十五日に生まれた。父季昵は貞右衛門季道の二男、母は高野□右衛門□應の女であった。姉は伊集院兼愷の妻となっている。弟に龍潜季翹がいる。石源次季融は実子、貞太郎季休は養子である。安永七（一七七八）年正月九日には貴澄の年男を努めた。翌八年の桜島の大噴火に際しては記録を残し、後年、それを主に『桜島燃之記』が成った。天明二（一七八二）年二月五日には小姓となった。同五年五月二十七日には、彼の文武諸芸への志が貴澄の目にとまって、御目録青銅百疋を賞として与えられた。寛政元（一七八九）年十一月二十六日、御小納戸役となった。翌年五月二十七日、太守斉宣が東福寺城の別業に入った。

この時、囃子が演じられたが、その時季虔は太鼓役を務めた。貴澄は、時服麻袴を与えると共に、目録青銅百疋を与えて褒めている。四年二月、五年四月にも同様のことが行われた時、季虔は太鼓役を勤めて、褒美を受けている。四年は同じく斉宣の為であったが、五年は中将重豪の為であった。又、四年の時は側用人鎌田愛太夫から褒賞されている。五年閏正月十二日、貞右衛門季願の養子となっていた二男季達（季融）が戻るといふ事件が生じた。この為、季虔が妻子と共に季願の跡養子となった。享和二（一八〇二）年十月十二日、御内証横目に任じられた。翌三年正月四日、家督を継いだ。文化五（一八〇八）年正月十一日、物奉行に任じられた。六年二月には物奉行取次役となっている。十三年末、季願から天流の兵法を学んでいた義兄伊集院兼愷にこれを惣伝した。彼自身は父季昵から同法を伝えられ、季田以来四代目の垂水家の師範を継いだ。天保六（一八三五）年十二月十六日、家督を女婿の季休（馬場弥兵衛二男）に譲った。『垂城三十六歌仙』の編集が、彼の引退に花を添えることになったようだ。九年二月には、又貴典の命を受け、「改写」して『桜島燃之記』を纏めている。亡くなったのは十二年三月八日、七十二歳であった。

季虔は、天流の兵法家に生まれた。しかし、少年時代から彼は、文武両道に秀でていたようである。太鼓役に花があり、天流兵法師範としての勤めも立派に果たせた。義兄兼愷と手を添えて、垂水郷の文武両道を主導した一生であったと評せようか。

いうのは、南国垂水郷では寒い季節の方が心を動かすということであろうか。恋部が哀傷よりも少ないというのも、恋愛にそれ程心を動かすということがないからかも知れない。

三十六人の身分、官職上の特徴を記すと、

領主 二人 貴典、貴澄

同室 三人 綺佐子、絮子、恵能子

家老 四人 伊集院兼迢、同兼貞、同兼愷、町田實裕

のように郷の最高位者が四分の一を占めている。その他も側近や地位が高く、役職の重かった者が多いことは間違いない。江戸時代、地方では上から文化活動が行われることが多かったが、垂水歌壇も、その典型的な姿を示していると言っても宜さそうである。

次に、『浪の下草』歌人と『浪の藻屑』歌人、両期を通じて最盛期にある歌人という風に、便宜上、所収歌数が倍程に違うことを基準として、三十六人を分けてみると、

『浪の下草』（が盛りの）歌人 八人

安山親備、伊知地季翹、肝付兼伯、蘭牟田貞如、伊知地季呢
長友善弼、田中種貞、肝付兼頭、

『浪の藻屑』（が盛りの）歌人 十一人

増水氏輔、安山親敬、前田清憲、桑波田景之、伊知地季休
伊知地季融、内田昌貞、島津貴典、安山親直、川上親暁

谷山智昭、（『浪の藻屑』に三十首以上ある者で）

両期を通じて最盛期にある歌人 四人

伊知地季虔、伊集院兼愷、宮原景雄、山下清方

（『浪の藻屑』に二十首以上ある者で）

のようになる（問題もあるが、一応の目安として）。

『浪の下草』から歌人として評価されているものが十二人、『浪の藻屑』で頭角を現した者が十一人（三十首以上で）と一応言えようか。垂水歌壇を作った末川周山の没後、歌壇の牽引車となったのが、伊知地季虔、伊集院兼愷、宮原景雄の三人の百首以上入集歌人であった。そして、『浪の藻屑』で兼愷が百首以上選り入れた他の三人は、『浪の下草』後に詠歌活動の盛んになった者達であった。この歌壇の構成が垂水歌壇の活動期を比較的長く続けさせたのであろう。

伊集院兼愷は何故か末川周山の和歌を『浪の藻屑』に一首も入れていない。或いは、垂水歌壇は、末川周山の時代から兼愷達の主導する時代への間で、一屈折したのかも知れない。しかし、この屈折は活動の障害とはならず、新たな歌人達を生むことになったように見える。そこに時代を主導した兼愷達の熱意と指導力とを見るべきなのである。垂水歌壇は、それを育てた周山の時代から兼愷達の時代へと見事に継承されたのである。

猶、文化九（一八一二）年正月に周山によって完成された『浪の下草』も、二十三年後に完成した『浪の藻屑』も各集末の歌数と実数とに差がある。総数そのものが、『浪の下草』で実数千五百一首に対して記載数千五百五十首、『浪の藻屑』で実数千九百九十七首に対して記載数二千首、と異なっている。『垂城三十六歌仙』について調査し

26 伊知地貞右衛門季道	十首	28 増水七郎右衛門氏顕	九首
29 伊集院八之丞兼倫	八首	29 川井田角兵衛義直	八首
29 川井田善助義陳	八首	32 公夫人絮子君	七首
32 伊集院清遊兼貞	七首	32 伊知地大隠季昵	七首
32 末野八太郎兼道	七首	36 長友庄藏善弼	六首
36 橋口平内兼定	六首		

兼愷が三十六人を選ぶとなると、右の三十七人の中から選ぶということになったのかも知れない。とすると、季虔に命じたのは、兼愷が第一の歌人とした季虔の目で、秀歌を選び出し、より優れたものにして欲しいという期待が含まれていたのであろう。

この集中第一の歌人ということの外に、筆者は、絵のことがあったのかも知れないと考えている。もつとも、「いにしへの三十六調仙になすらへ」ということが、絵をどの程度意識したものであったか分からない。懷紙に立派な文字で書くという方法も無くはなからう。季虔には、安永八（一七七九）年の桜島噴火の記録『桜島燃之記』の作（天保九年）もあつたが、絵の才も認められていたのかも知れない。人物像は描かなかつたが、季虔は、ともかく絵の必要を感じて、「各そのうたのころろ二随ひ 図画にうつして」提出したのであつた。

猶、藤井蘭香斎のことは全く分からない。

さて、季虔の選んだ三十六人であるが、三十一人は前記三十六位までの人物である。漏れた人物を抜き出すと、

20 川井田善右衛門義智 十六首 28 増水七郎右衛門氏顕 九首

29 川井田角兵衛義直	八首	29 川井田善助義陳	八首
32 末野八太郎兼道	七首	36 橋口平内兼定	六首

の六人である。三井田氏の三人は『松操和歌集』歌人であり、特に義智は十六首も入集している。『垂城三十六歌仙』に川井田氏が一人も入っていないことから見れば、身分上の扱いが下されたのであろう。

一方、加えられた五人を所収歌数と共に記せば、次のようになる。

田中休之進種貞	五首	肝付啓迪兼頭	五首
町田大雅実裕	四首	高野夕可昌憲	三首
慈誠君恵能子君	二首		

この五人の中、田中種貞と肝付兼頭は『松操和歌集』歌人である。慈誠君は身分で入れられたのであろう。町田実裕と高野昌憲が選ばれた理由は何であろうか（大雅、夕可という号が意味あり気でもあるが）。

又、各和歌の出来で人選が決まったのかも知れない（身分を除けば）が、選歌の基準、経緯は全く分からない。

『垂城三十六歌仙』の和歌を『浪の藻屑』の巻（部）で分けてみると、

巻一（春）	九首	巻二（夏）	一首	巻三（秋）	七首
巻四（冬）	七首	巻五（恋）	二首		
巻六（雜）	七首（哀傷）	三首（離別）		（羈旅）	（神祇）
				（釈教）	

（賀） 無い

のようになる。夏部が一首であるのに対し、冬部が秋部と同じ七首と

垂水の文学(七)

『垂城三十六歌仙』、影印と研究

— 南九州の国文学関係資料(二十四) —

解 説

橋 口 晋 作

本書は、奥書によれば、慶応元(一八六五)年七月、町田實維が伊地知家にあつた『垂城三十六歌仙』を借り出して、写したものである。伊知地家にあつた本は、原本成立から二十九年しか経っていないので、恐らく、伊知地季虔の作成した原本であつたに違いない。

この写本は、奥書から、町田實維の文字、藤井蘭香斎の絵と考えられる。原本は、「うたのころこ二随ひ」という表現から考えると、編者の季虔が文字も絵も書いたのであろう。

さて、領主島津貴典は何故「浪の藻屑集中より三十六人の秀歌をえらひ いにしへの三十六譚仙になすらへてたてまつる」仕事を季虔に命じたのであろうか。

『浪の藻屑』は、貴典が伊集院兼愷に命じて、編集させたものであつた。完成は天保六(一八三五)年十二月であつた。そして、翌七年には、兼愷はこれを歌道の師飛鳥井雅光の許に送って、添削を求めたという。雅光からは、四月、兼愷に「和歌三代集 句題口傳一卷」が贈られている。

『浪の藻屑』完成後、兼愷の歌集編成の熱は少しも減じていなかった。彼は、今度は自分の和歌に対象を変えて編集作業に入り、この年十二月に、最初の歌集『すさひ草』を完成させている。

この兼愷に、引き続いて「集中より三十六人の秀歌をえらひ」出す仕事を命じる方法もあつた筈である。何故兼愷に命じなかったのか、具体的な理由は不明であるが、季虔が命じられたのは、第一に集中最も多くの和歌を詠じているからに違いない。『浪の藻屑』巻末の歌数書き上げ(後述のように実数とは異同がある)によって、所収歌の多い順に三十六位まで挙げると、次のようになる。

1 伊知地宗右衛門季虔	百八十四首	2 増水吉兵衛氏輔	百八十二首
3 伊集院八兵衛兼愷	百七十五首	4 安山三左衛門親敬	百四十六首
5 前田藤角清憲	百四十四首	6 宮原源左衛門景雄	百二十九首
7 桑波田竜雲景之	九十八首	8 伊地知貞太郎季休	八十二首
9 伊知地右源次季融	八十一首	10 内田五左衛門昌貞	六十七首
11 安山代七郎親備	五十九首	12 伊集院八兵衛兼愷母	五十二首
13 公貴典公	五十首	14 安山作十郎親直	四十六首
15 伊知地龍潜季翹	三十五首	16 川上市郎兵衛親暁	三十三首
16 谷山孫兵衛智昭	三十三首	18 山下喜才太清方	二十三首
19 伊知地休意重朝	二十一首	20 上原兎十郎尚貞	十六首
20 川井田善右衛門義智	十六首	22 肝付平右衛門兼伯	十五首
23 蘭牟田周右衛門貞如	十四首	24 景德公貴澄公	十二首
25 伊集院隠山兼迢	十一首	26 涼相君綺佐子君	十首